

教育委員会会議録

令和5年(2023年)8月定例教育委員会会議

令和5年(2023年)8月24日(木)					
開 会 日	令和5年(2023年)8月24日(木)				
開 会 時 間	午後2時00分 ~ 4時00分				
開 会 場 所	SPring熊本花畑町 7階 D会議室 ※一部オンライン開催 オンラインでの出席者については各執務室				
出 席 者	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 5%; text-align: center;">委 員 会</td> <td>遠藤洋路 教育長 出川聖尚子 委員 小屋松徹彦 委員 西山忠男 委員 苦野一徳 委員 澤栄美 委員</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">事 務 局</td> <td>田口清行 教育次長 中村順浩 総括審議員兼教育総務部長 須佐美徹 学校 教育部長 他</td> </tr> </table>	委 員 会	遠藤洋路 教育長 出川聖尚子 委員 小屋松徹彦 委員 西山忠男 委員 苦野一徳 委員 澤栄美 委員	事 務 局	田口清行 教育次長 中村順浩 総括審議員兼教育総務部長 須佐美徹 学校 教育部長 他
	委 員 会	遠藤洋路 教育長 出川聖尚子 委員 小屋松徹彦 委員 西山忠男 委員 苦野一徳 委員 澤栄美 委員			
事 務 局	田口清行 教育次長 中村順浩 総括審議員兼教育総務部長 須佐美徹 学校 教育部長 他				
報 告	<ul style="list-style-type: none"> (1) 令和4年度(2022年度)図書館事業統計について (2) 令和6年度市立高等学校使用教科用図書の採択について (3) 令和5年度全国学力・学習状況調査の結果について (4) 令和6年度(2024年度)熊本市立学校管理職等採用選考試験の申込状況等について 				
自 由 討 議	(1) 天明校区施設一体型義務教育学校について				
署 名	西山忠男				
	澤栄美				
会議録作成者	教育政策課 玉野あゆみ				

<p>〔開会の宣告〕 遠藤洋路 教育長</p> <p>〔会議の成立〕 遠藤洋路 教育長</p>	<p>令和5年8月定例教育委員会会議を開会いたします。</p> <p>本日は、私の他5人の委員が出席しておりますので、この会議は成立しております。</p> <p>会議録署名人は、西山委員と澤委員とします。</p>
<p>日程第1 前回会議録等承認</p> <p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>それでは、会議日程の日程第1 前回会議録承認の件に入ります。</p> <p>7月27日開催の令和5年7月定例教育委員会会議録を各委員のお手元に配布しております。この会議録を承認することに、ご異議はありませんか。</p> <p style="text-align: center;">(異議なしの声)</p> <p>異議なしと認め、前回会議録等を承認することに決定します。</p>
<p>日程第2 事務局報告の件</p> <p>(1) 事業・行事等報告について</p> <p>前回定例会議(R5.7.27)以降の事業・行事報告 今後の予定</p> <p>西山忠男 委員</p> <p>遠藤洋路 教育長</p> <p>中川浩二 教育政策課長</p>	<p>この内容に直接関わることはないんですが、事務局報告に加えていただきたいと思う事項があるんですね。それは、昨日、初めてニュースで知ったんですけど、出水中が九州の音楽コンクールで金賞を取ったという話があって、そういうのは我々、ニュースで見ないと分からないんですね。また、秋に美術館に行くと、必由館の生徒が特選を取ったりしているんですね。千原台のスポーツ部の活躍はニュースで見ますが、特に文化部関係のこういうニュースに接する機会がないので、こういう喜ばしいニュースはぜひ報告していただいて、みんなで喜び合いたいと思うんですけど、いかがでしょうか。</p> <p>今の件は事務局から、いかがですか。</p> <p>事務局の報告とは別に、例えば市長報告をしましたものは、適</p>

	<p>宜タブレットに入れて報告を差し上げているところではありますが、今の文化部も含めて、そういった子どもたちの活躍をどこまで書くのかというのはありますけど、そういったものについては少し検討させていただきたいと思います。</p>
西山忠男 委員	<p>お願いします。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>出水中は、私も昨日ニュースで見知りしました。</p>
西山忠男 委員	<p>そうですか。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>できる限りそういう報告もできるようにしたいと思います。 他にご意見、ご質問はありますか。 ご発言がなければ、本件は以上といたします。</p>
<p>日程第3 報告</p>	
<p>・報告(1) 令和4年度(2022年度)図書館事業統計について</p>	
<p>《山内光博 市立図書館長 説明》</p>	
西山忠男 委員	<p>9ページの電子図書館の推移なんですけど、貸出数はぐんと年度を追うに従って増えているのに、タイトル数はあまり変わらないんですね、2年度、3年度、4年度。ということは、同じタイトルの本を多数の人が借りるようになっているということなんでしょうか。</p>
山内光博 市立図書館長	<p>電子図書館につきましては、回数制限がありましたり、期間が限定されているものがございます。一度購入しても、その回数借りられずと自動的に削除されていくというような状況ですので、ある程度の予算をかけないと、タイトル数の維持もできないというような状況です。</p>
西山忠男 委員	<p>タイトル数というのは、保持しているタイトル数のことですか。貸し出されたタイトル数ではないということですか。</p>

山内光博 市立図書館長	ご説明しました令和4年度末の2万2,014件というのは保持しているタイトル数でございます。
遠藤洋路 教育長	紙の本でいえば蔵書数というものですよね。
山内光博 市立図書館長	はい。
西山忠男 委員	この図の見方が、左側の数字と右側の数字が違いますけど、これはそれぞれ何を表しているんですか、このグラフの右側の数字と左側の数字。
山内光博 市立図書館長	9ページでしょうか。
西山忠男 委員	一番下の図です。
遠藤洋路 教育長	棒グラフと折れ線グラフが合体しているグラフですね。
山内光博 市立図書館長	左側の数字が保持しているタイトル数でございます。右側の数字が実際の貸出冊数です。
西山忠男 委員	分かりました。ありがとうございます。
遠藤洋路 教育長	タイトル数が2万二、三千くらいで貸出数が28万9,000ということは、1タイトル当たりになると10回以上、平均すれば貸し出されていると。そういう理解でよろしいんですか。
山内光博 市立図書館長	数字上でいきますとそのようになっています。ただ、ご利用で多いのは、小・中学生用のタイトルが、実際は多いということになっています。
小屋松徹彦 委員	教えていただきたいんですが、8ページの表の中に登録者と利用者とありますけど、この関連性があるのかどうか。登録はしているけど、実際利用している人は別にいるということか、登録している人が延べ利用しているということなのか、ちょっとそこを教えてください。
山内光博 市立図書館長	登録者数は、この年度で新規の登録をされた方ということでこの数字を出しています。利用者数とは、実際にその年度で利用さ

	<p>れた方ということで、その前に登録された方も利用されていますので、その利用者数ということになっています。</p>
小屋松徹彦 委員	分かりました。
遠藤洋路 教育長	<p>私から1つ、5ページに貸出者数の年齢構成がありますよね。これを見た上で、先ほど電子図書については8割ぐらいが小・中学生だというふうに言っていましたか。28万9,000、29万冊の8割ぐらいが小・中学生だとすると、この紙の本の貸出冊数と比べてみて、紙の本を見るとどうも小・中学生は特にそこまでたくさん本を読んでないように見えますけど、電子書籍もあわせて考えるとものすごくたくさん読んでいるということになるように思います。16歳から29歳は相変わらずというか、少ないように思うので、できれば紙の本と電子書籍とあわせた数が書いてあると全体像がもっと分かるかなと思うんですけど、そういう工夫を次からしてもらえませんかでしょうか。</p>
山内光博 市立図書館長	了解しました。
遠藤洋路 教育長	<p>じゃ、よろしくをお願いします。 他にご意見、ご質問はありますか。 ご発言がなければ、本件は以上といたします。</p>
・報告(2) 令和6年度市立高等学校使用教科用図書の採択について	
《福田衣都子 指導課長 説明》	
西山忠男 委員	<p>先ほどのご説明で毎年の採択となるというお話がありましたけど、毎年、こういう作業をするのは非常に大変じゃないかと思うんです。これは何年かに1回ではいけないんですか。</p>
福田衣都子 指導課長	これにつきましては、毎年の採択ということを聞いております。
西山忠男 委員	<p>毎年やらなきゃいけない理由がよく分からないんですけど、働き方改革によって教員に余計な負担をかけたくないということがあるなら、そんな毎年やらなくてもいいんじゃないかと。3年に</p>

<p>福田衣都子 指導課長</p>	<p>1回ぐらいで切り替えてもいいんじゃないかという気もするんですけど、どうして毎年になっているのか、その辺の事情を知りたいと思うんです。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>すみません、その点に関しては確認をさせていただければと思います。よろしいでしょうか。</p> <p>はい。</p> <p>他にご意見、ご質問はありますか。</p> <p>ご発言がなければ、本件は以上といたします。</p>
<p>・報告(3) 令和5年度全国学力・学習状況調査の結果について</p> <p>《福田衣都子 指導課長 説明》</p>	
<p>西山忠男 委員</p>	<p>今ご説明にありましたように、ICTに関しては全国よりもはるかに高いのに、主体的、対話的で深い学びに関してはマイナス7%ぐらいですね。たくさんの項目で劣っているというのは、これは非常にショッキングな結果で、せっかくICTを入れたのに、それが主体的、対話的な学びにつながっていないというのは、これはどうしたらいいものか。非常に困ったなと思っているんですけど、その点はいかがでしょうか。</p>
<p>福田衣都子 指導課長</p>	<p>私たちもこの結果を非常に重要と受け止めておりますし、昨年に引き続き注視しているところです。授業改善に関しましては、教育センターでも、目当て、対話、振り返りという3つを大事に日々取り組んでおられますし、また、私たちのほうでも、授業改善の分析資料等を各学校に分かりやすく示すなど工夫して呼びかけをしていきたいと思っております。</p> <p>なお、どうやったら改善につなげていくのかというのは、さらにしっかり研究していきたいと思っております。</p>
<p>西山忠男 委員</p>	<p>現時点で何か思い当たる原因とかというのはありますでしょうか。</p>
<p>福田衣都子 指導課長</p>	<p>課内でもいろいろ考えたのですが、具体的にここはということ</p>

遠藤洋路 教育長

ろがまだ十分には思いつかないところです。やはり目当てをしっ
かり提示するとか、児童生徒たちがしっかり話す時間を設けると
いう具体的な工夫は、今後もしっかりやっていく必要があるのか
なと思っているところです。

これはアンケート調査というか、どう思いますかという調査な
ので、同じ基準ではかっているわけじゃないので、本当に実際の
授業が主体的、対話的で深い学びという活動をあまりしていない
のか、それともそういう自覚がないということは確かなんでしょ
うけど、実態としてはどうなんでしょうね。同じ授業をしていて
も多分このぐらいの差は出るような気はするんですけど、別にも
っと差が出てもいいような気もするし。いいように考えれば、評
価が厳しいなら低い数字になるでしょうし、要求水準が高ければ
高いほど低い数字になるんだと思います。実態はどうかという
ことと、この捉え方がどうかということがはっきりしない
ので何とも言えないところはあるかなと思いますけど、指導課と
してはどうなんでしょう。実態として主体的、対話的で深い学
びの観点からの授業改善というのが全国に比べてかなり遅れてい
るというか、劣っているという、そういう認識はありますか。

福田衣都子 指導課長

実態を全て把握しているわけではないので正しい答えにはなら
ないかもしれませんが、やはり子どもたちがそう感じるというこ
とは改善の余地があるのではないかと考えております。

また、文科の調査におきましても、主体的、対話的で深い学び
に関する項目の高いところは、学力との相関関係も見られるとい
うところです。やはり子どもたちが意欲的に学びに向かう姿勢と
いうのは、これからもしっかりと、このポイントは上げていくこ
とを目指して、授業改善に取り組みたいと思っております。

遠藤洋路 教育長

分かりました。

西山忠男 委員

学習習慣、学習環境のところもやはりマイナス7なんですよね。
これは自分で計画を立て勉強していますかという質問ですから、
割と明確で、やっぱりそういう人が少ないということですよ。こ
こも困ったもんだなと思うんですが、タブレットを活用すれば
そういう計画的な勉強もしやすいんじゃないかと思うんですけ
ど、そうはなっていないというところで何か改善していかなく
いけないなと思います。何かご意見はございますか。

福田衣都子 指導課長

ご指摘のとおり、そこはとても大事なところだと考えております。今度、分析資料も出しますので、その点も含めて検討して、必要事項や何か分かること、また提案等あれば載せたいと思います。

遠藤洋路 教育長

せっかくタブレットを家に100%持ち帰っているのに、家で確かに計画を立てて勉強していますか、全国平均より圧倒的に高いぐらいの数字になってほしい気はしますね。そこはぜひ取組をしていきましょう。

苦野一徳 委員

2点ほどあるんですが、1つ目は、先ほどの質問、自分たちでどうしているかという評価なのでという点です。私が仲間の研究者と行った調査で1つ傾向として出てきたのは、これが当てはまらないように思うんですけど、こういう結果の分析の仕方は結構大事だと思うんですが、探究をメインでやった学校は、一時的に自己効力感が下がるということはあたりするんですよね。それはやっぱり自分が主体的になっているので、うまくいかないことに対して自己効力感が下がって、でも、だんだんと自分がコントロールをにぎっているんだという感覚になってくるとまた上がっていくと。こういう傾向が実はあるというのが見えてきたりもして、果たしてこれがそれと合っているかどうか分からないんですけど、そういった丁寧な分析をする必要があるなというのが一つです。

もう一つは、今お話を伺って、目当て、対話、振り返りというのはとても大事だと思うんですけど、それが上から与えられて下りてくるものになってないかというのは検証する必要があると思います。目当てがいつも与えられて自分のものになっていない。対話をさせられていて、振り返りもさせられている。いつもこれを、ずっとこのサイクルをやらされ続けたら、低くなるのは当然だと思うんですよ。大事なものは、自分で目当てを、あるいは仲間と一緒に目当てを自分たちでつくっているかとか、対話も必要に応じて自分たちで主体的に対話をしているのか、やらされる対話じゃなくて。はい、これから対話しましょうということが結構多いんですよね。いろんな対話の型がありますが、やらされる対話がすごくいろんな現場で多いと思うんです。そうならないかどうか検証が必要です。

振り返りも、必要もないのにもかかわらず振り返れ、振り返れと毎

	<p>時間やらされていたら嫌になっちゃいますよね。ですから、この3つが本当に子どもたち自身のものになっているのかというのを考える必要があって、行政視察で廿日市の宮園小学校に行きましたが、私たちが見させていただいたのは個人探究でしたけど、あそこがずっと取り組んできたのは自由進度学習です。例えば自由進度学習だと、自分で目当てを考えて、自分で計画を立てますよね。それが終わり切らないと、じゃ、これも家庭でやろうみたいなかたちで自分のものになっているんですよね。なので、勉強をやらされる感じでそうになっていたらやらないかもしれないけど、自分で計画を立てて、いついつまでにこれは終わらせるぞと、自分の責任の下で学びを進めていけば、必然的に家でやろうという率も上がってくると思うんです。そういった自由進度学習、ちょっと今、やりになり過ぎている感もあるような気もしますが、型だけをまねるみたいなのが散見されるので、それは問題だなと思いますが、そういったものの研究も例えば先生方でやって、こういった部分を大事にすればこういったところも改善するのかなというような議論もできたら十分かなと感じました。</p>
<p>福田衣都子 指導課長</p>	<p>大変参考にさせていただきたいと思っております。その点に関しては、教育センターともしっかりと共有、共通理解しながら進めてまいりたいと思います。</p> <p>何より子どもたちが自分にとっての目当てになること、それから、教育センターも大事にされていますが、振り返りについても最後のまとめのときだけではなく、最初に来ることもあるし、必要なときに子どもたちが振り返りに取り組めるように工夫してまいりたいと思います。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>学校に行くのは楽しいと思いますかというのが高いのは救いというか、これが一番大事かなと思うんですけど、ここは常に高いんですよね、熊本市はね。授業に関する指標はいつも低いんですよね。でも、授業で主体的でもなくて、授業も分からないのに学校に行くのが楽しいって、そんなことがあるんですか。何を楽しみに学校に行っているんですかね、みんなね。</p>
<p>苦野一徳 委員</p>	<p>友達ですね。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>友達としゃべるのが楽しいんですかね。それはそうなのかもしれませんが、こういう回答の傾向は毎年一緒なので、実態がど</p>

うかというより、何となくそういう回答の傾向があるのかなというふうにも思います。どのくらいこれが実態を反映しているのか。子どもたちが他の授業と見比べて、こっちが分かりやすいねとか、分かりにくいねと判断しているわけでもないでしょうしね。でも、少なくとも自分であまり授業が分からないとか、あまり授業で主体的になれてないと思っているのであれば、それは解消する必要は確かにあると思いますし、結果として、そんなに正答率が高いわけでもないのに、そんなに授業がすばらしくできているということは今のところ評価はできないんでしょうからね。改善していく部分はたくさんあると思います。毎年同じ傾向であるということは何らかの原因があると思いますので、それはぜひ探って、指導課のほうでも研究してみてください。

澤栄美 委員

これは熊本市だけの傾向ではないと思うので、どうなのか分からないんですけど、やっぱり中学校の授業というのは小学校に比べて自由度が少ないと思うんですよね。なぜかという、それは目の前に受験がありますからとか、ここまではやらなくちゃいけませんからということで、なかなか授業改善がしにくいのかなと。全国より低いということとの兼ね合いはちょっとよく分からないんですけど、私が思ったのは、子どもたちがどう考えていて、先生方は授業改善をどうやっているのかというのはどこかで調べることはできるんですか。

というのは、私も退職校長の指導主事などの知り合いが何人かいますけど、学校を回ると中学校の授業改善がなかなかできていないというのをよく耳にするんですよね。だから、先生方がこういう結果を見て、自分たちの授業がそれでいいのかということをしっかり考えていただいて、「とはいっても受験がありますから」という、「とはいっても」が頭につかないようにしていただくのが一番かなと思いました。

私も学校に行くのが楽しいというのがとても高いのは、すごく不登校が増えている割には、数値的に全国より高いというのはいいことだなと思いました。

遠藤洋路 教育長

受験も全国でやっているわけですから、熊本だけにあるわけじゃないので。全国との比較なので、受験はやっぱり理由にはならないということなんでしょうね。もし本気で受験対策するなら、授業の内容はよく分かりますかの部分はもっと高くないと困りますからね。そこは中学校の先生方に確かにどのくらい自覚があっ

<p>福田衣都子 指導課長</p> <p>西山忠男 委員</p> <p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>て、改善に努めているのかという部分はもう少し問う必要があるのかもしれない。</p> <p>他にご意見、ご質問はありますか。</p> <p>ご発言がなければ、本件は以上といたします。</p> <p>指導課長、さっきのは分かりましたか。</p> <p>先ほどの高校の教科書を毎年採択する理由ですが、高校の場合、入学年度ごとに各学校で教育課程表を作成しております。年度ごとに微調整も行われております。また、教育課程が変わると、履修する教科、科目が変わってまいります。また、生徒自体も学年によって変わるということで、実態に合わせて、毎年度の採択になっているということでした。</p> <p>分かりました。</p> <p>では、ご発言がなければ、本件は以上といたします。</p>
<p>・報告(4) 令和6年度(2024年度)熊本市立学校管理職等採用選考試験の申込状況等について</p>	
<p>《上村清敬 教職員課長 説明》</p>	
<p>西山忠男 委員</p>	<p>今のお話にありましたけど、教頭の志願者が非常に減っているということですよ。令和2年度で12%あったのに、令和5年で6.5%。すごく減った、半減しているということになるので、これはちょっと何とかしないといけないなと思いますね。女性はそれほどでもないようですが、やっぱり男性が減っているんでしょうね。どうしてこれだけ急に減ったのか、何かお考えはございますか。</p>
<p>上村清敬 教職員課長</p>	<p>令和4年度の試験におきまして、有資格者が200人以上増えているところなんですけど、これは学校事務職員が初めて教頭選考の資格を得たためです。この二百数十人の大きな部分を占められている割には学校事務職員の方で試験を受けられた方がほとんどいらっしゃらなかったということが、これだけ一気に下がったものの大きな要因ではありますけど、従来の有資格者が受けないと</p>

遠藤洋路 教育長

いう傾向もまた一方であるのは確かでございます。

だんだん下がっているのは間違いないと。急に減っているのは母数が増えたからという、そういうことですかね。事務職員の方もせっかく受けられるようになったのに、どんどん受けていたきたいなと思いますけど、その辺の啓発というか奨励というか、その辺はどうしているんでしょうか。

上村清敬 教職員課長

当然、初年度、こちらの資格があるということは大きくお伝えしたところなんですけど、改めて事務職員の方に限って特に奨励しているとか、校長先生から声かけしていただいているということはないものかと考えています。

遠藤洋路 教育長

でも、事務職員に限って新たに対象になったんですからね。事務職員に言ってあげないと、なかなか急には受けないんじゃないかという気はするので、そこは特に事務職員の方に受けてもらえるような働きかけは必要なんじゃないかなと思いますけどね。

上村清敬 教職員課長

教職員課としましては、学校事務職員の方々との意見交換会等、多数機会がございますので、その辺もまた含めまして周知啓発してまいりたいと考えております。

遠藤洋路 教育長

分かりました。
他にご意見、ご質問はありますか。
ご発言がなければ、本件は以上といたします。

日程第4 自由討議

・(1) 天明校区施設一体型義務教育学校について

《福田衣都子 指導課長 説明》

遠藤洋路 教育長

では、ただ今から討議に入ります。時間は30分程度を目安とします。
委員の皆様からどなたでも結構ですし、どんなことでも結構です。ご意見がございましたらお願いします。

西山忠男 委員	ご説明をいただいて、学年区分にいろいろあるのに非常に驚いたんですけど、本市の場合、天明の場合、どういう学年区分をどういう考えで行うかというのは非常に大きなポイントになるんじゃないかと思うんですね。教科書は全国一律の教科書を使わなきゃいけないですから、独自のカリキュラムをつくるわけではないと思うんですけど、そういう状況の中でどういう考え方で学年区分というのを決めていくのかと。それは今まであまり議論したことがなかったような気がするんですけど、その点は指導課としては何かプランがあたりでしょうか。
福田衣都子 指導課長	現在のところ、それは模索中という段階ですので、県だけではなく、県外も調べながら情報収集しているところでございます。ですので、気づき等ありましたらぜひご意見を出していただければと思うところです。
遠藤洋路 教育長	そこは今までのところ、あえて白紙にしているというか、これまでももともと前期、後期みたいな感じで、6年と3年みたいに分かれるような前提になっていたような記述も結構あったんですけど、それをできるだけなくして、まだこれから考えようという、そういうスタンスにしているところなんですよ。
澤栄美 委員	関連するんですけど、一番上に天明校区義務教育学校学級数とちょっと太字で書いてありますけど、これは前期、後期と書いてあるので、これはたまたま一応書いてあるということですか。
福田衣都子 指導課長	そもそも呼び方として、小学校にあたる学年を前期課程、中学校にあたる学年を後期課程と呼んでおりますので、今回はその呼び方で書いております。まだ区分を考えてのものではございません。
遠藤洋路 教育長	これまでもこういうふうに書いているところもあるんですけど、これをできるだけ前期、後期という言い方もやめて、こういう書き方もやめようというふうにしているので、ここに残っちゃっているという感じですね、どちらかというね。
澤栄美 委員	やっぱりそうしてしまうと、どうしても小学校と中学校感覚が抜けないよねというのがるので、一番最初にそのところにチェックをしたんです。

ついでに言うと、やっぱり学年区分をどうするかというのは教育内容が先に決まるのかなと私は思うんです。鞆の浦学園が人数的にもちょうど同じぐらいというか、鞆の浦学園のほうがちょっと少ないんですけど、ここが生活科と総合的な学習の時間を中心というところがすごく参考になるんじゃないかなと。さっき探求型の学習がちゃんとできているのかという議論もありましたけど、やはりそれらをつないでいくというのがすごく、熊本市が目指している子ども像にもつながるし、学習内容の中でどこを中心にしていくのかといったときに生活科とか総合的な学習の時間の内容というのは割と自由に設定できるというところから考えると、鞆の浦学園の方向性は参考になるのかなというのが1点です。

それから、先日、ある日本人学校に以前行かれていた先生と話していて、日本人学校がどういう形態だったかというのはよく分からないですけど、今、義務教育学校や小中一貫校とかありますけど、やはり先生たちがみんなで一緒になって課程についてとか、今の学習の進捗状況とか、子どもたちの様子とか話し合うのはすごく大事だと実感したとおっしゃっていました。それまでは職員室が小学校と中学校別々だったのが、一緒になったら本当によく子どもたちの成長を見ながらやっていけたということをおっしゃっていたんですね。だから、教育課程をつくるということが第一に来て、そして、それを継続していくのに先生方が常に一緒に話し合っていくとかたちは一つ大事な事かなと思いつつ聞いたので、ちょっと紹介しておきます。

遠藤洋路 教育長

去年視察に、去年でしたっけ、今年の最初でしたっけ、視察に行った広島のところは、部屋は同じなんだけど、実は見えない線があって、こっちが小学校、こっちが中学校の職員室ですみたいな感じになっていましたから、見かけだけでも分からないというか、いろんな運用の仕方があるのかもしれないと思いましたけど、今、澤委員がおっしゃったように、せっかくでしたらよさが発揮できるような造りにしていくということ。

あと、いくらそういうふうに意図として造ったとしても、実際そこに入った人たちが、いや、こっちは小学校です、こっちは中学校ですとなっちゃってもしようがないと思うので、そこはそうならないように気をつけていく必要があるのかなとは思っています。

見つけたら片っ端から消しているのに、どんどん出てくるということは、多分担当の方はまだ前期、後期という頭なんだと思うんですよ。だから、そこはやっぱり変えていかなきゃいけないし、

小屋松徹彦 委員	<p>その発想じゃないんだよというのはぜひ指導課の中でも徹底してほしいなと思います。</p> <p>もう一回学年区分に戻りたいんですけど、僕は3・4・2というふうに思ったんです、当初。ところが、具体的に見ますとほとんど4・3・2か、2・2・3・2と。どこが違うかという、僕は3年生と4年生をどう扱うのかということにポイントを置いたんですけど、何でそこに僕がポイントを置いたかという、私は教科担任制をちょっと早い段階から入れましょうということを考えていまして、そのときに3年生の教科と4年生の教科の学習の内容というのがどうなんだろうと。例えば教科担任制を取るほどの専門性が4年生からなのか、3年生も入るのかという。そのところで僕は4年生からじゃないかなと思ったので、4・5・6年と1年を2つ目の区分にして、3つ目を8・9年で考えて、第2区分からは教科担任制を徹底してやっていくという、そういうようなことで学年区分というのを考えてみたんです。3年と4年の学習の内容というか、ここはどんな具合なんでしょう。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>4・3・2にせよ、4・5にせよ、最初の4年間を一固まりにしているパターンが多いですね、確かに。</p>
小屋松徹彦 委員	<p>そうですね。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>この4年というのはどんな意味があるかというのわかりますか。</p>
福田衣都子 指導課長	<p>一般的には低学年、中学年、高学年と3・4年を一まとまりにして考えることは通常多いですけど、実際、4年生からクラブ活動が始まったりとか、3年生と4年生の違いは非常に大きいものがあるなとも感じております。ですので、何を目指していくかによって、いろいろ対応ができるんじゃないかなとも思います。</p>
小屋松徹彦 委員	<p>ということは、あまり学習内容でどうのこうのというよりも、他の場面で環境が変わってくるというのが大きいんですか。</p>
福田衣都子 指導課長	<p>学習指導要領上は1・2年生で完結するもの、3・4年がくりになっているものがございますので、その辺は非常に配慮をしていかなければならないと思います。</p>

遠藤洋路 教育長

学習指導要領が確かに2年ごとになっているから、2年、4年というまとまりなんではないでしょうか、これ。ちょっと理由はよく分かりません。県内のものを見ても、全部4年までが一くくりですよ。

小屋松徹彦 委員

ちょっとそこはもやもやしていましたが、仮に4年、5年、6年、7年を第2区分としたときに、私はその第2区分からもう教科担任制を取り入れていくというふうなことでいかがかなと思っていました。

それから、先ほど澤委員がおっしゃっていた職員室の問題ですけど、これも教科担任制を取ることによって、配置を教科ごとの島にしていく。そうするとそれぞれの教科ごとの打合せといいますか、これがスムーズにいくんじゃないかなということで、学年ではなくて、教科ごとの島をつくっていくという、そういった職員室の在り方もいいかなと思ったものですから、関連して述べました。

西山忠男 委員

学年区分の話ですけど、やはり9年はあまり長いので、どこかで区切りをつけないといけないのは確かだと思うんですね。そのとき、生徒から見たときに何か達成感がないと、区切りと区切りの間でですね、新しい区切りに入ったという感覚にならないとやっぱりフレッシュな気持ちにならないと思うんですね。それで、今、小屋松委員が言われた教科担任制が入るんだよ、ここからはという、そういうものがあつたりとか、例えば低学年の場合は、クラス編成はずっと変えないまま上に上がっていくとか。何かそういう工夫をしないと、区分を設けることにあまり意味がなくなってしまうですよ。

やっぱり各区分の中でカリキュラム編成というのがしっかり考えられるべきで、カリキュラムの達成目標というのがあるべきだと思うんですね。それが達成されたかどうかというのを見ながら、次のステップに入っていくというのが必要じゃないかなという気がします。具体的にそれをどうやるのかという問題はありますけど。

その辺を各学校がどういうふうにして、学年区分の設定をしているのかというのがもう少し情報が欲しいなと思いました。例えば京都の向島、2枚目ですと、ベーシックステージ、チームステージ、ビジョンステージで授業の時間も変えているとかですね。

	<p>それで何か工夫があるようなので、その辺をもう少し調べていただければありがたいなと思います。</p>
<p>福田衣都子 指導課長</p>	<p>こちらは実際、担当が視察に行っておりますので、また改めてそこを調べていきたいと思います。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>京都に行った人は誰かいますか。じゃ、少しコメントをお願いします。</p>
<p>平野正規 藤園中学校教頭</p>	<p>おとし、向島秀蓮に視察に行かせていただいたんですけど、先ほどから上がっております4・3・2制を導入しております。4・3・2にした理由は何かということで校長先生にお尋ねしたところ、4年生と7年生のリーダーシップの育成を重視しているからですということをおっしゃっていました。4年と7年がこれまでずっと積み重ねてきた中で一番リーダーシップを発揮できる可能性があるというふうに理解をされていたということで、4と3、そして2という区分に設定されているということでした。私が聞いたのはその点でございます。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>ありがとうございます。具体的にはどういう場面でリーダーシップを発揮するんですか。行事とかですか。</p>
<p>平野正規 藤園中学校教頭</p>	<p>行事ですね。行事や委員会活動、そういったところでこちら側から意図的にリーダーシップが発揮できるような場面をつくり上げて、そこで4年生と7年生を前面に出してから指導されているということをおっしゃっていました。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>分かりました。ありがとうございます。そういう何か意図があって、そういう区切りをしているという、それぞれの意図があるんでしょうね。</p>
<p>苦野一徳 委員</p>	<p>少し実現可能性を脇に置いてしまうんですけど、想像力を働かせるといいますか、裾野を広げるために少し検討もできたらなと思うのは異年齢学級ですね。公立だと、福山市の常石ともに学園がイエナプランを取り入れてやっています。名古屋市でもイエナプランを参考にして、そういった学校が今進んでいます。</p> <p>私立だと大日向小・中学校、長野県にイエナプランの学校ができていますけど、イエナプランの場合は、日本でやる場合は1・</p>

2・3で一まとめ、4・5・6で一まとめ、7・8・9で一まとめというのが一般的かと思うんですけど、これだと先ほど西山委員がおっしゃったようなどこかで区切りということかというと、例えば6年生の段階、1・2・3で一学級になると、教える側、教えられる側みたいな、くるくる入れ替わることがあったりするんですね、共同で学びをやっていくと。最初は1年生は面倒を見てもらっているんだけど、だんだん2年生になってくるにつれて下の子の面倒を見たりとか、こういう役割がクラスの中でどんどんくるくる入れ替わって行って、4・5・6になってくると、6年生はすごく頼もしくなっていくと。ここで一旦小学校は卒業ということになると、ここでやっぱりリーダーとしての6年生というのがあると思うんですよね。その後、7・8・9年で中学校になって、気持ちを新たにまた8・9で一緒になっていく。1年生、2年生、3年生というかたちでまた教え合い、学び合う関係というのができていくと。これは私は今後の学校の在り方としては非常に可能性あるものだと思っていて、先行事例ができていないことはないかなと思っているんです。なので、一応想像力をたくましくすると、そういったものもちょっと考えてもいいかなと思うんですね。

ただ、もしもそういったことを目指したいと思うとするならば、これは先生が50人ということなんですけど、これも実現可能性は無視して言いますが、例えば準備段階で100人とか120人ぐらい、こういった学びを一緒につくっていききたい先生はいませんかということで募集をかけて、この指とまれ方式でこういったことを一緒に学んでいきたいと思います。全国、海外いろんなところに視察に行って、こんな可能性があるんだということを知って行って、どうやったらそういったことが実現できるのかというのを一緒に学び合っていく数年間を120人ぐらい、みんなでやりませんか、プロジェクトをやっていきませんかというかたちでやって行って、その中で共に学び合ってきた先生たちの中から、さあ、じゃ、この天明で新しい学校をこういうかたちで一緒にやる人というようなかたちで、またこの指とまれでこの学校の先生になっていく。ここで経験を積んだ方たちがまた市内いろいろと散らばって行って、その学校がまた少しずつ学びが変わっていくということに寄与するというような何十年かスパンの計画の一つの要として、この学校を位置づけるということも可能なのではないかなと思いますので、もしそこまでの本腰を入れられそうなのであれば、私はとてもすてきなことなんじゃないかなというふ

遠藤洋路 教育長	うに思います。 今の点は何かありますか。
澤栄美 委員	私も、苫野委員がリヒテルズ直子さんと書かれたイエナプランの本とか2つぐらい、大分前に読んだんですけど、こっちに質問してもいいですか。
遠藤洋路 教育長	もちろん。
澤栄美 委員	イエナプランの場合は完全に学年を解いてということですか。例えばさっき言ったように、総合的な学習の時間とか、1つの領域とか、それに限って、そういう異学年のプロジェクトを組んでいくというかたちもあるんですか。というのが、各教科、時数というのが文科のほうから標準時数というのが決められていますよね。それはやらなきゃいけないんじゃないかなと思うんですけど、瀬戸市のSOLAN小学校は、多分総合を中心にそういった活動をしているんじゃないかなと思うんですが、私もちょっと詳しく今の状況を知らないんですけど。だから、文科が言っている教科をきちっとやるということと、もちろん総合もそこから外れているわけじゃないんですけど、どこでそういう探究的な活動とか、異学年交流とかができるかというのを現実的に考える場合はどうなのかなというのをお聞きしたいなと思いました。
苫野一徳 委員	現実的に日本でやっているイエナプランは異学年でやっているんですね。異年齢学級なんですけど、学びの進め方がまさに教科に関しては自由進度なので、子どもたちが自分で学習計画を立てて、その中で学び合いが学年を越えて起こるんですね。お兄ちゃん、お姉ちゃんたちの学びを見られるので、こんなことを次の学年になったらやるんだということも知ることができて、非常に相乗効果があるわけなんですけど、その過程で年上の子が年下のことを教えてあげたりだとか、そういったことが頻繁に見られるんですね。 同時に、授業時数は、子どもたちが学習計画を立てていきますので、このことでちゃんと管理することができると。そこをクリアする。 それから、これも様々な実証で分かっているのは、子どもたちが自分で学習計画を立てて学んでいくと、平均的な年間計画、指

標とかから比べても圧倒的に短い時間でできるんですよ。短い時間で学習を進めることができるというのが分かっていて、そうすると結構探究の時間も取ることができるようになりますので、そういった探究の時間をまた異学年で一緒にやっていくということもできる。澤委員がおっしゃったように、総合だけを異学年でやっていくという手もあると思うんですよ。そこはちょっとケース・バイ・ケースで考えればいいのかと思うんですけど、異年齢学級でやっていくと、日常的に異年齢の子たちが共に過ごしますので、そこで多様な人たちと出会ったり、同質性が高いよりは関係性が豊かになりますので、できることなら異年齢学級ということもあっていいかなと思うんですが、プロジェクト、総合だけを一緒にやっていくというのもありかなとは思いますが。

なので、本当にそれをやるならば数年の研究が必要というのはそういうことなんですけど、つまり自由進度もできなきゃいけないんですね。これをやると、必然的に一斉授業ができませんので、子どもたちに、イエナプランの場合はインストラクションという時間があって、この辺りの単元を学んでいる子たちが数人ある一角に集まって、先生がそこで短く10分とか15分とかインストラクション、授業をするんですね。だから、45分とか50分とか先生がずっと時間を管理するわけではなくて、短い時間でまずインストラクションをして、子どもたちはそれぞれの場所に行って、学んでいって、分からなければお兄ちゃん、お姉ちゃんに聞いたり、友達に聞いたり、あるいは先生に聞いたりというようなかたちで、やっぱり授業を受けるというよりは自分で学びを進めていくという感じの学びへとかなり大きく転換しなきゃいけないので、本気でやろうと思ったら相当の力量と、あと、経験が必要にはなってくるんですけど、どこかできるところから始めていって、最終的にここを何年かかけて目指すみたいなこともできなくはないと思うんですね。実際、随分時間をかけて、常石も名古屋のほうも時間をかけてやってきましたので、一旦こういうところを目指すみたいなことをやったらできなくはないかなとは思いますが。

澤栄美 委員

そこで指導する教員の力量というのがすごく問われるんだろうと思うんですよ。だから、開校するまでの間にそういう教員をどうやって育てるかというところが必要なんだろうなと思って、今お話を聞いていたんですけど、例えば50人の先生全員というのはなかなか難しいので、一部の先生が長期研修に行ってもらっ

遠藤洋路 教育長

たりして、こういったところに。そういう人たちがリーダーシップを取って、そしてこういう教育をやるんだということが分かっている人たちに、そこに行ってもらおう。やっぱりこれは一大転換のチャンスなので、もちろん箱をどうつくるかというのを検討する必要はあるんですけど、先生たちを育てる仕組みというのにも必要かなと思いつつ、今聞きました。

熊本市立の特別支援学校を造ったときも、特別支援学校の経験はないので、先生に特別支援学校に長期で行ってもらって研修をして、実際それで帰ってきた人にやってもらおうということはありませんでしたので、もしそういうことであれば、イエナプランであれ、義務教育学校であれ、事前にずっとそこに行ってもらって、派遣して帰ってきた人に担当してもらおうということは考えてもいいかもしれませんね。

西山忠男 委員

苦野委員にお尋ねしますが、自由進度学習でイエナプランでやるような場合は、教員の負担が相当大きくなるんじゃないかと思うんですよね。一斉授業は割と楽だけど、個々の生徒に自分で学習計画を立てさせて、自由進度で勉強させるとすると、教員自身が一人一人の進捗を把握しないといけませんよね。そうすると教員の数もかなり必要になってくるんじゃないかと思うんですけど、その点はいかがなんでしょう。

苦野一徳 委員

導入当初、移行期は慣れるまでに結構時間がかかるので大変ではあるんですけど、慣れてシステム化されればむしろ負担は激減するんですね。激減だとちょっと言い過ぎかもしれませんが、システム化すればかなり先生の負担は減ります。なぜかという、子どもたちの学び合いの力を最大限に活用しますので、先生はその時間、子どもたちを本当に観察できるんですね、一人一人。一斉授業だとどの子が苦しんでいるとか、本当に目が行くのが結構難しく、マスを見るという目になるんですけど、一人一人が学んで自分の学習計画で進み、学び合っているのは、先生は結構時間の余裕を持って、一人一人を観察することができて、子どもたちは学習計画表で自分がどこまでできたか、できなかったかチェックして、その一覧になっているのをぱっと見て、今だったらICTを使ってぱっとどれくらい進んでいるかというのをすぐ見られたりするんで、先生は子どもたちの学びに向かうというか、それをしっかり把握するということがよりやりやすくなります

	<p>ね。</p> <p>先生同士とか、それから子どもたち同士だったり、子ども、先生たちの協働の力を使いますので、そういう意味ではオランダの場合、定時どころか、週三、四休まであったりしますので、本当に日本の先生の労働時間よりも圧倒的に少ないんですよ。そういったことはシステムをしっかりとつければ可能なので、本当にロングスパンで見なきゃいけないというところはあるかと思いません。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>実際にイエナプランの学校の先生の勤務時間は長いわけではないということなんですかね、今は。であれば、特にものすごい負担があるということではない。</p>
西山忠男 委員	<p>もう一つ、技術的な問題ですけど、移行はどういうふうにするのかというのがちょっと気になるんですよ。現在は小学校、中学校でやっているわけですね。それを義務教育学校に移行したときに、生徒は移ってくるわけですけど、新入生から新しいシステムでやって、在校生は今までどおりの小学校、中学校の分でやって、卒業するまで待つて完全に変わるというかたちになるんでしょうか。それはどう考えてらっしゃいますか。</p>
福田衣都子 指導課長	<p>もう一度お願いできますでしょうか、すみません。</p>
西山忠男 委員	<p>システムの学年区分の移行です。現在は小学校と中学校があって、その生徒たちが天明の義務教育学校に入ってくるわけですね。その時点で新しい学年区分に分けるのは不可能でしょう、その生徒たちは。新1年生から新しい学年区分でやりますと。在校生は今までの学年区分で卒業するまでやりますというかたちで、学年進行でやって行って、完全に新しい学年区分に移行するのか、それとも、今までの在校生も全部含めて一気に移行するのか、その辺の考え方はどうなんでしょう。</p>
福田衣都子 指導課長	<p>もちろんそこも含め、まだ模索中の段階ではありますが、指導課としましては開校と同時に一気に新しいシステムでという気持ちでおりましたので、そのために前年度までに何を、どんな準備が必要かということをあわせて考えていければなという状況ではございます。</p>

遠藤洋路 教育長

例えば4・3・2制にして、さっきの京都みたいに、じゃ、5年生から50分授業にしましょうということで、前の4年生が義務教育学校になって5年生になったときに50分授業なのか、それとも前の小学校と同じように45分授業なのかという、そういうところですよ、今おっしゃったのは、1年生から学年進行でやっていくと、そこに到達するまでに5年かかるのでちょっと長過ぎるような気は、確かに。新しい学校ができましたといっても、それは1年生だけで、完成するのは9年後ですとなるのはちょっと長いような気がしますよね。だから、基本は最初から移行するんじゃないかなというふうに思いますけど、1年目、2年目はできること、できないところというのはあるのかもしれませんが、初年度は1年生だけ、次は1年生、2年生というのはさすがにペースがゆっくり過ぎるんじゃないのかなとは思いますがね。

小屋松徹彦 委員

原則にまた戻りそうですけど、やっぱり今度の天明の件は今後の熊本の学校づくりをどうするかということの先行事例にしてもらいたいと思うので、多少は冒険といいますか、思い切ったことをやっていくというか、それはやっぱり必要だろうと思うんですよ。

そういったことと、もう一点は、子どもたちに分かりやすい授業というか、子どもたちが分かったと喜ぶような授業をつくるのが非常に重要なので、私はその観点から教科担任制をしきりに言っているんですけど、そこで先生たちが質の高い授業をつくることによって、子どもたちが学校に行くのが楽しくなるというか、そういうことをイメージしながら学校づくりをしてもらいたいなと思っているんですね。

だから、出発点はそういうことで、苫野委員がおっしゃったように、この学校は一つの今後の熊本の学校づくりの先行事例として新しいかたちをつくるんだという、その意気込みは忘れてほしくないというのが一つです。

それと、これはもうちょっと現実的に考えると、例えばこれは広島視察をしたところの学校だったと思うんですけど、中学校の高学年、つまり8年、9年生か、ここぐらいが小学校の授業を担当するという、そういう機会を設けたりしているんです。これは面白いと思うんですよ。中学校の生徒が小学校の全学年の教師になるというか、そういった経験をするというのも面白いなと。異学年の交流という意味ではですね、と思いました。

苦野一徳 委員

私の理解、記憶が正しければ、義務教育学校は結構学習指導要領の柔軟な活用ができたと思います。学年の枠に縛られなくてよかったと思いますので、先ほど言ったような異年齢学級もやりやすいんですね。義務教育学校であればよりやりやすいと思います。例えば4年生だけど、6年生のことをやってみようみたいなこともやりやすいので、その子のペース、5年生だけど4年生に戻った学びをやってみようというようなこともやりやすくなるので、学び残しが少なくなったりだとか、その子のペースで学べるという意味ではいいかなと思うんですけど、ただ、もう一方で、本当に差し出がましくいろいろと言いはしたものの、やっぱりこの学校づくりの主役になるのは地域の先生方であり、子どもたちであると思いますので、本当にそういったことを主役の方たちが望むかとか、一応情報提供でこんなこともできるというようなことは共有したいと思うんですけど、本当に差し出がましくこちらからこういうことをやるぞみたいな、そういうトップダウン的なものというのはあまり望ましくないなと思いますので、あくまでも情報提供として話をさせていただいて、学校づくり、これから当事者の皆さんでやっていくというもののお手伝いというかたちで、私たちは加わらせていただけたらありがたいなというふうに思っています。

遠藤洋路 教育長

ちょっと先ほどの件で確認を苦野委員にしたいなと思うことがあるんですけど、各教科の時数というんですか、授業時数とか、異学年の学級をつくったときにはそれぞれの子どもが学習計画をつくるので、それぞれの子どもを見ればそれぞれの教科の授業時数を満たしているという、そういうお話かなと思ったんですけど、それは一人一人が例えば最初の1年生、2年生でもいいし、何年生でもいいんですけど、その授業時数を全部満たすような学習計画をつくるということだと、偏りとかは出ないですか。例えばずっと算数が好きだから、算数ばかりやったら、3月は国語しか残っていないみたいな、そういうことにはならないですか。

苦野一徳 委員

具体的にどういう運用をしているのか、日本の場合、日本の制度の中でどうやっているのかは、常石だったり、大日向に多分聞けば、教育委員会ともどういうやり取りをして、当初計画がどうでとか、そういったことも多分分かると思うんですけど、一応理論的にはおっしゃるとおりで、標準授業時数と全然違う、それよりも圧倒的に短い時間で全部マスターしちゃう子もいれば、ある

遠藤洋路 教育長

いはもっと時間がかからないとマスターできないという子もやっぱりいますので、本来はその子に合った時間で学んでいけるようにサポートしていくというのが本来だと思うんですけど、そのあたりの整合性というのは多分各現場でうまくやっていくんだと思うんですね。なので、その辺の細かいやり方は多分先行事例に聞けば詳しく教えてもらえるんじゃないかなと思います。私もちょっと技術的なことは十分に把握はしていないんですけど、そういうふうになっているんだと思います。

分かりました。

あと、もちろんそれぞれの学校で、地域でつくっていくということに違いはないわけですけど、熊本市として苫野委員を教育委員にしているということは、それは苫野委員の考えを教育政策に反映させたいという市の意志があるわけですから、そこはあまり遠慮しないでどんどん言っていただけたら。苫野委員だけじゃないですよ、皆さん、そうですけどね。いやいや、私たちは脇役ですからといってもしょうがないので、それは、じゃ、誰が教育委員でも一緒なのかといったらそうではないはずなので、意見としてどんどん言っていただければいいなというふうには思います。遠慮しないでくださいと別に言わないでも、皆さん、遠慮しない方だとは思いますが。

小屋松徹彦 委員

もう一点いいですか。開かれた学校づくりという観点から、地域との連携といいですか、これはやっぱり非常に大事な点だと思うんですけど、これも視察に行ったところでは、学校地域協働本部だったか、何か要するに本部をつくってやってらっしゃるんですね。あれは恐らく熊本でいうところの自治協議会あたりとはまたちょっと異なる性格のものだと思うんですね。熊本の自治協議会をそのまま学校との連携ということで持ってきても恐らくあまり機能しないというふうに思っていますので、できれば地域の方々の人材を活用するという意味では、そういった本部も一緒につくって、地域の方々はそこで一緒に学校づくりをやっていきましょうみたいなことも同時に呼びかけていかれてはいいのかなというふうに思っています。

出川聖尚子 委員

学年区分の件でちょっとお聞きしたいんですが、4年生と7年生は少し授業が難しいと感じる子どもが多く出てくる学年かと思うんです。そういったときにその前の1・2・3・4とまとめた

遠藤洋路 教育長

りするのがいいのか、それとも1・2・3と分けて、4・5・6とかいうふうに後ろの学年にまとめたほうがいいのかというのが少し分からないので、区別のところの件について教えていただければと思うんですが。

いかがでしょうか。勉強が難しくなる学年を学年グループの最上級生に入れたほうがいいのか、下級生として入れたほうがいいのかということですかね。もしそれは、苦野委員がおっしゃったように、それぞれの学年、異学年で学級を組むのか、それぞれの学年で組むのかによっても違うのかもしれませんが、指導課としてはいかがですか。

松岡美幸 指導課教育審議員

教育の中身ということに関して今おっしゃったことは、4年生からちょっと抽象的なこととか、中学の1年生の段階ではかなり内容も多くなってということも確かにあるので、そのことを配慮する必要はあると思うんですけど、学年区分の区分けのことと、教育の中身のことの関連というところまでまだしっかりと考えていない状況なんです。

今、苦野委員がおっしゃったようなかたちのイエナプランとか、そういう一緒になって学年の縦の中で学び合うということであれば、教育内容と区分というのはすごく関連してくると思うんですけど、今の学校の横で切っているかたちであれば、行事だったりとか、何か大きな節目だったりとか、そういうところの関係になってくるので、今の一般的にある学校の中でのやり方で学年区分というのはそこまでないのかなとは思いますが。中身によってすごく影響してくるので、そこは今後考えていかなきゃいけないというふうに思います。

西山忠男 委員

今のご説明ですけど、私は、カリキュラム編成をきちんと考え直すことをしないのであれば、学年区分をこんなに一生懸命考えて新しい区分にする必要はないと思うんですよね。もう6・3でいいと思うんですよね。やっぱりイエナプランでもいいですけど、新しいカリキュラム編成、新しい指導法というのがそこに入ってくるからこそ、学年区分を変える意味が出てくると思うんですよね。ですから、そこをしっかりと考えていかなきゃいけない。ご指摘があったように、小学校から中学校に行くと格段に勉強が難しくなりますよね。内容が豊富になってきます。特に算数が数学になるとか、昔は英語が小学校はなかったもので、英語がある。今だ

遠藤洋路 教育長

ったら小学校の英語は文法を教えないけど、中学校になると多分文法はきちんと教えないといけなくなると。そこは明確な難しさのステップアップがあるんですから、今の教科書を使うのであればそれをどうやって乗り越えて、例えば4・3・2にするのであれば、小学校も今の高学年と中学校の1年生をまとめて教育ができるのかということをやっぱりしっかり考えていかないと、生徒が振り回されると思いますよね。それはちょっと心配です。

おっしゃるとおりで、行事の班分けとか、委員会の活動とかだけなのであれば、別に4・3・2だろうが、6・3だろうが、それこそ学校が始まってから好きに決めていいぐらいの話かと思いますが、教育課程ということでは教科担任制にするかしないかとかも含めて、人の配置にも関係してくることなので、そこはやっぱり事前によく決めておかないと、誰を学校に配置するかという、何人要するのかというところにも関係してくるので。それは単にそれぞれの授業は教科でやるし、行事のときに4・3・2にしますみたいな、そういうことだけではないのだろうなと思いますので、西山委員のおっしゃったとおりかなというふうに思います。

その上で、この前、教科書採択をしましたけど、教科書は完全に小学校、中学校ですよ。6年生の教科書には中学校に行ったらこうだよみたいなことが書いてあったりして、これは義務教育学校の人とか、何か疎外感を感じないのかなと思ったんですけど、教科書はあれでいいのかなというのは教科書採択をしながらちょっと疑問に思いましたね。小学6年国語と書いてあるじゃないですか。中学1年数学と書いてあるじゃないですか。だから、何というか、4・3・2ですよとかいっても、教科書に6年生と書いてあって、中学1年生と書いてあったら、何か虚構のような感じがしませんかね、子どもたちからしても。その辺はどう感じるのかなというところは少し思いましたね。これはやっぱり小学校と中学校なんじゃないのというふうに教科書に書いてあったら思っちゃうような気もしますよね。そこの工夫というか、実際どうされているのか分からないですけど、4・3・2とかしているところがですね。実際の教科書とかの現実と学校の建前を一致させたいなら、6・3だったり、3・3・3だったりするほうが楽なのかもしれませんけどね。無理に4・5とかにしないでね。それも含めて、どこまでリアリティーを持ってできるかというのは少し考えなきゃいけないんじゃないかなと思います。

<p>澤栄美 委員</p>	<p>皆さんは7年生ですよとって、教科書は中学1年と毎日朝から書いてあって、それってどうなのかなと。7とかにマジックで書き直してとか、そんなことないでしょうね。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>私も同じことを思っていたんですけど、視察に行かれたということなので、その辺のところはどうだったのか、今分かっているなら教えてもらいたいです。</p>
<p>松岡美幸 指導課教育審議員</p>	<p>どうでしょうか。実際そういう本音と建前、現実と学校の学年区分のずれをどうしているのか、見てこられましたか。</p> <p>視察じゃないんですけど、私が聞き取ったところの感想というか、いろんな学校に電話して聞いたところ、やっぱり義務教育学校は小学校、中学校なんだけど、組織が違うから、そこを一体的にするのはかなりの至難の業というか、いろいろあるけど、ちゃんとうまく運営ができていくということは、一貫校としてある程度下積みが何年かあって、そして義務教育学校として開校しているというところで、結構やっぱり円滑に行くまでに時間を要するというのと、学年区分もやっと今から実動を考えていきたいと思うとか、ちょっとやりながら考えていっていますというところがありました。現場としては、6・3以外でやるとかなりの混乱も生じるので、4・3・2とかそういうことよりもやっぱり6・3のほうがスムーズだなというところも幾つかあったという状況があります。</p> <p>先生たちはやっぱり統一感的なところも、物理的なもので初めて話合いもできたとかいう声も聞かれるので、そういう小学校、中学校を一つの組織としてというところにも結構苦労されるという現状もあるというふうに感じました。</p>
<p>平野正規 藤園中学校教頭</p>	<p>私は、広島府の府中学園というところに視察に行ったんですけど、そこでは新しい教科として、ことば探究科というものを設けておられまして、1年生から9年生まで一貫した教育をされていました。対話と議論、作文と物語、情報伝達、情報分析という4つの大きな内容を構成して、それぞれに評価基準を作成して、ルーブリック評価を実施されて、9年生になったら卒業論文を作成してから授業参観の日に発表される取組をされていました。そういった意味では、9年間を見通した教育課程を新教科を立てられるということで、各教科じゃなくて、新教科でそういったことで計画</p>

	<p>を立ててから実践されているところにすごいなと感じた次第です。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>そうすると新教科のときには9年生だけど、数学の時間は中学3年生なんですか。</p>
<p>平野正規 藤園中学校教頭</p>	<p>そうなるかもしれないですね。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>そういうことになりますね。分かりました。</p>
<p>西山忠男 委員</p>	<p>新教科で9年ということは、それは移行の問題がありますよね。だから、いきなり全員が新教科でやるわけにいかないでしょう。だから、新1年生からずっと育て上げてきて、9年生になって初めて完成するという新教科のカリキュラムになるということですよ。</p>
<p>平野正規 藤園中学校教頭</p>	<p>そういうことになりますかね。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>9年一貫の新教科だとするとそうですね。ただ、とはいえ、じゃ、それは小学校1年生だけがやって、あとの人はやらない、今までどおりですというのもちよっともったいない気がするので、だから、1年目の新教科の、今までずっとそれをやってこなかった9年目の子どもが受ける新教科と、1年生からやってきて9年目になっている子どもがやるのは内容的には大分変わるんでしょうけど。</p>
<p>平野正規 藤園中学校教頭</p>	<p>あと、新教科だけでなく、総合的な学習の時間も、9年間を通して探究するという取組をされている学校もございました。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>分かりました。各教科になると、どうしても教科書とか教材とか、完全に無視してやるわけにもいきません。もちろん教科書を使えばいいわけで、毎時間使う必要はないとはいえですよ。基本にはそうなりますよね。そういう現実を見ると、さっき指導課もおっしゃったように、6・3以外は結構大変なんですよ。その割には、でも、調べてもらった例はみんな、4・3・2とか、2・2・2・3とか、どうしても最初4年生で区切りが多いです</p>

榎木敏之 天明中学校校長

よね。6・3もありますけどね。これだけみんなに普及しているということは、それはそのメリットもあるんでしょうか。そういう意図があるんでしょうからね。そこはもうちょっとこれからよく研究していく必要はあるかなと思いますね。

今日は天明の学校の方も入っていると。何かコメントはありますか。

いろんな情報と考え方といろんなヒントをいただいて、またこれから考えていきたいと思います。

一つ、学年区分については、どういうところから始まっているか、前に視察に行ったときに聞いたときには、まず1つ目は、中1ギャップの緩和ということで、中1になるときに全ての変化が集中しているということで、中1に環境も変わるし、教科の学習のやり方も変わるという、そこをちょっと分散できるものは分散するという考え方が一つあって、それから、2つ目が、実は9年間で一番不安定になる時期が、呉市がアンケートを実施したときに、小学生で実は1年生から4年生までは非常に意欲も高く、自分自身の万能感というか、やればできるみたいなのがとても高いんだけど、小学校5年生から非常に落ちていくというようなアンケートが出て、それが不登校とかいろんな中学校1年生の変わり目が出てくる問題行動なんかにつながっているということが少し分かってきて、中1の前後でどうにか重点的な取組をしようということで、1年生から4年生までと中2、中3は割と安定した時期で、小学校5年、6年、中1ぐらいが非常に揺れ動く時期ということで、4・3・2という区割りを呉市が一番最初にしました。なぜ区割りをそこに持ってきたかということ、小学校段階と中学校段階に区割りをすることによって、真ん中が中学校と小学校の先生がどうしても協働しないといけない。小学校5年、6年、中1の段階をつくれれば小学校の先生も入らないといけないし、中学校の先生も入らないといけない。

実際、授業は、小学校の免許を持っている先生が6年生まで授業をしていて、そして、中学校の免許を持っている人が中1段階から授業をしているので、授業自体はそんなに交流していないんですよね。乗り入れ授業以外はですね。だから、授業だけだと交流があまりないので、そういう区割りをつくって、両方の学年が、特に小5、小6、中1年代を、落ち込む年代を手厚くすることで区割りが4・3・2というのが恐らく全国の8割ぐらいはそういう区割りで今やっているんだと思います。

遠藤洋路 教育長

ただ、基本的に今までの課題をクリアするための考え方の区割りでしたので、これからの新しい教育課程をつくっていく中での区割りというのはまた違った考え方で、西山委員、苫野委員からいただいた教育課程を絡めた区割りというのも考えていくと、また何かできるのかなとは思ったところです。

今日はいろんなヒントをいただきましたので、また天明校区で共有しながら進めていきたいと思います。

趣旨としては、5年、6年、7年目を手厚くするというか、そういう趣旨もあるということでした。なので、教育委員会としても、じゃ、その部分、その学年に教員の配置を手厚くするかということなのであれば、そういう区分にする意味もあるのかもしれませんね、確かに。そこも含めて、人員配置のところも関係する部分でしょうから、考えていく必要はあるでしょうね。

苫野一徳 委員

情報提供までなんですけど、1年生から6年生まで完全縦割りクラス、7・8・9の完全縦割りクラスでやっているのが、きのくに子どもの村学園という和歌山にある学校で、これは北九州にも学校があって、北九州子どもの村小中学校というのがあって、ここは完全縦割り、それが一つの団体、クラスをプロジェクトごとにファームという農作物を作って料理してとか、何か家を作るとか、そういう建築をするようなプロジェクトであったりとか、こういうそれぞれ自分の希望するプロジェクトに入ってやっていくという学校もあります。カリキュラム編成ということで、市立高等学校も探究系の中核にしようとか、そういったことを掲げていますので、これからやっぱり探究を中核にしたカリキュラムというのは小中でも非常に重要になって、呉市も既にそういった気持ちであると思うんですが、そういったときにこういうやり方もあるんだなというのを知ると、またちょっと可能性が見えてくるかなと。完全縦割りクラスをやらなかったとしても、総合は、じゃ、そんな感じでやってみようかということももしかしたらできるかもしれないですし、そこでどういうふうに1年生から6年生までが協働して総合に取り組んでいるのかというのをまた見ると、それもまた新しい発見もあるんじゃないかなと思うので、まさに想像力の翼を広げるためにそういったところの視察に行ってみてもいいんじゃないかなというふうに思いました。

遠藤洋路 教育長

分かりました。

<p>西山忠男 委員</p>	<p>これはどうやって決めますか。誰がどうやって決める、これから。それもスケジュールも含めて考えていくか。</p> <p>これはやはりかなり技術的な問題が絡んでくるので、我々だけで想像で決めるのは難しいと思うので、やっぱり現場の天明中のほうでプランを立てていただいて、それを改めてここで議論して決めるというのが重要じゃないかなと思うんですけど、榎木先生はどう思われますか。</p>
<p>榎木敏之 天明中学校校長</p>	<p>先ほど事務局からもありましたけど、何かやりながら少し改善して変えていくところもあるということもありましたので、そういうのも必要かと思います。</p> <p>一つ思うのは、今、小中一貫になって、小学校4校と中学校1校で職員の小中学校の合同会議というのを月1回持ちながら、子どもたちに必要な力とか目指す子どもの姿みたいなのを共有しながら進めているところなんですけど、先生たちは5年後まではあまり今想像しないで、本当に1年先、2年先のことを考えながら、今の授業を改善していっているところなんですよね。だから、そういう意見であれば、中学校から出していってもいいかなという気持ちはあるんですけど、苫野委員やいろんな情報をお持ちの委員さんの情報を基に、熊本市のこれからの何十年後か先の学校の姿に合うようなものをつくるとなったときには、やっぱりしっかり検討する場所があって、こういうかたちがいいんじゃないかなという案を出していただくほうが、学校からプランをつくるとなるとそれなりの案しか出ないような気はします。天明の先生たちで考えていって、こんなのがいいんじゃないかというのは可能だとは思いますが、そして、何年かしていく中でそれを修正していくとか、改善していくというのはできると思いますけど、今思う可能性というのはそういうところです。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>当然教育委員だけで決める話でもないし、かといって、やっぱり学校だけで決めてくれというのも、考えてくれというのも難しいし、指導課だけで考えるものでもないし、そういうのをつなぐところが必要だと思いますよね。さっきから言っていますように、人とかお金にも関係するわけなので、指導課だけじゃなくて、教職員課だって関係するし、他の課も施設とかだって関係してくるわけですね。やっぱり教育委員会全体、学校も含めて、検討する場が必要なんだろうと思いますけどね。</p>

	<p>せっかく苦野委員とか皆さん、今、榎木校長からもあったように、専門的な知見を持っている方もいるので、それが入るような仕組があったらいいですよ。</p>
苦野一徳 委員	<p>以前少しご提案させていただいたことがあったような記憶もあるんですけど、事務局の中に専属のこれのプロジェクトチームというのは、今はないんです。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>今はないです。</p>
苦野一徳 委員	<p>かなり大がかりなプロジェクトだと思いますので、専属のプロジェクトチームで、指導課がいろんな業務の中でこれをやるというのは大変だと思うので、チームをつくって進めていくといいのではないかなと。私もそれこそ教科書や教員の面接とかできていないところもあるのでご奉公したいと思いますので、そういったこともチームをつくるのがいいんじゃないかなと思います。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>教育改革推進課で全体的な調整というか、進行はしているんですけど、専属というのは、チームということではなくて、それぞれ担当者がやっているというのが実態ですよ、確かにね。でも、今ありましたように、学校から教育委員までをカバーするようなものであれば、それなりの体制は必要でしょうね。それは教育改革推進課も含めて、ちょっと検討しましょう。</p>
苦野一徳 委員	<p>先ほど来議論になっている、15年、20年、30年先を考えて、1本目の矢といいますか、そういった非常に重要な位置づけだとするならばかなり力を入れる必要もあるかなと思うんですが、そのためにやっぱり多くの先生方や私たちが学び合う機会が必要だと思うんですよ。ですから、そういったプロジェクトチームが例えばあって、みんなで学び合って、全国や、あるいは世界の情報のシャワーを浴びながらアイデアを練っていくという、結構そういう準備期間が必要で、みんなの温度感を高めつつ、共有しつつというのも大事だと思うんですよ。どこかだけが温度が高くなって、他の誰もちょっとついていけないみたいなのはあまりよろしくないと思うので、何となくみんなで温度感を共有していけるようなプロジェクトを少しずつじわりじわりとやっていく必要があると思います。そういった市内の場づくりといいますか、みんなで情報共有して一緒に対話するというような、そういうと</p>

遠藤洋路 教育長

ころもとても大事な内容になってくるなと思います。

分かりました。高校改革はようやく5年ぐらいかけて何とか軌道に乗ってきたというか、学校がそれぞれできるようになってきた状況ですから、これについてもここから5年ぐらいかかる話ですから、そういう体制をやっぱりつくっていかないといけないかなと思いますね。

西山忠男 委員

プロジェクトチームをつくって考えていくのはとても大事だし、賛成なんですけど、もう一つ重要なのは、やっぱりこの学校で教えたいという人が出てくるかということで、そういう人を少し募って、プロジェクトチームに入れてもらうとか、そういうこともあってもいいのかなと思います。要するに教育委員会の押しつけでこんなシステムをつくりました。おまえたち、やれと言われているんじゃないかという、教職員もやる気が出ないので、最初からプランニングに関わってくる人が何人か、2人でも3人でもいいですから、いると違うと思うんですよね。スムーズにできると思います。いかがでしょうか。

遠藤洋路 教育長

誰をチームのメンバーにするかと、それは確かに大事で。もちろん現場の先生は必要だし、一方、さっき苦野委員がおっしゃったように、いろんな世界の事情とかも調べられる人も必要かもしれないし、そういう人選も大事だと思いますので。

押しつけということに関しては、何でしょう、今見ていると、どっちかというとむしろ譲り合いというか、私たちだけじゃ決められませんからみたいな感じでみんなで譲り合っているような感じもしないでもないですけど。ちょうどそれがうまく両方からちょうどいいバランスになるように、チームの中でメンバーも含めて調整していく必要はあるのかなとは思いますが。

時間も結構たちましたので、そろそろよろしいですか。

では、以上で本日の自由討議は終了いたします。今日はたくさんご意見いただきまして、大変有益な議論になったと思います。今日の話し合いも踏まえながら、今後の進め方を検討させていただきます。

〔閉会〕

遠藤洋路 教育長

本日の会議日程は全て終了いたしました。これで、令和5年8月定例教育委員会会議を閉会いたします。